
楔の花嫁

如月皇夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楔の花嫁

【Nコード】

N2550Q

【作者名】

如月皇夜

【あらすじ】

如月神社の巫女である瑠花は、とある理由で神社から外へ出れない。そんな彼女の傍に控えているのは幼馴染みであり、守護者である遠矢と奈都。

ある日、瑠花達の目の前に瑠花を『花嫁』と呼ぶ謎の青年が現れて…？

謎の青年の正体は？瑠花に秘められた本当の力とは？

禁断の恋？そんなの関係ない！！なファンタジーラブコメディ！！

第0話 登場人物（前書き）

この小説には残酷な描写やR - 15を思わせる表現が出てきます。
十分ご注意ください上でお読みください。

第0話 登場人物

登場人物

如月瑠花

如月神社の巫女。ある理由で神社から外に出してもらえなず、学校にも通っていない。動植物と心を通わせる事が出来る。

水無月遠矢

瑠花の幼馴染みであり守護者。昔から如月家に仕えている水無月家の次期当主。瑠花の事は妹のように可愛がっている。

葉月奈都

瑠花の幼馴染みであり守護者。昔から如月家に仕えている葉月家の娘。次期当主の兄よりしっかりしてる姉御肌で、瑠花を愛でるのが趣味。

如月瑠璃

現如月家当主にして瑠花の祖母。その昔、強大な力を持つ八百万の神を封じ込めたと言われている。瑠花を後継者と決め、色々教え込んでいる。

皇夜

瑠花の前に現れ瑠花を『花嫁』と呼ぶ謎の青年。かなり強い力を秘めているらしい。

朱音

黒髪に赤眼の美女だが、その正体は蜘蛛の妖怪の親玉『女郎蜘蛛』。瑠花が幼い頃から執拗に狙う。

.

第0話 登場人物（後書き）

不定期連載です。話と話の間がかなり開くと思いますが、長い眼で
生暖かく見守ってくださると嬉しいですよ。

第1話 記憶と謎01

『えーん、えーん』

奥深い山の中にポツリと建っている、何処か寂れた社の前で少女は泣いていた。

人ならず者に追われ、必死に逃げて、気付いたらここにいた。前も後も右も左も分からない山の中、少女は泣いていた。

覆い茂る木々により、昼だと言うのに薄暗い山の中は、少女の中の恐怖心を煽った。

泣き止まない少女の前に、いつの間に現れたのか、一人の青年が立っていた。

蒼銀の髪に鮮やかな紅眼のその青年は、少女を見下ろした。

『…何を泣いてる』

『ここ、何処か分からないの。それにお守り、失くしちゃった。大事な大事なお守り』

掠れた声で告げる少女に、青年は肩眉を寄せた。

『お守り？そんなのこの辺では見なかったが……』

『どうしよう、どうしよう。失くしちゃ駄目って言われてたのに。私を守ってくれるお守りなのに』

ジワリと少女の目に涙が溜まる。

そんな様子に青年は小さく溜息を吐くと、彼女の頭を優しく撫でた。

『……お前、楔の巫女くさびのみこだろう？』

『楔の巫女……？なあとそれにそれ？』

少女は首を傾げ青年に問う。

鮮やかな若葉色の瞳が、青年を映し込む。

『妖が喉から手が出るほど欲しい人間のことだ。お前、妖に狙われてるのだろう？』

『妖って、あのへんな生き物の事？』

『変な……まあ、人の形を成してない者が殆どだが』

だが人の形をしている者もいるしな……と青年は苦笑を零した。

『私が狙われるのは、楔の巫女だから？』

『ああ。……俺が、助けてやろう。お前に指一本触れさせない』

『本当？』

『勿論。その代わり……………』

ピピピピピピ……と鳴る目覚まし時計に、少女、如月瑠花きさらひるかは

パチツと眼を覚ました。

「……懐かしい夢、見ちゃった」

先程まで見ていた夢は、鮮明に思い出せる。あれは、幼い頃の記憶だ。

妖と言われる者達に追われ、祖母から持たされていたお守りを失くし、山奥に存在する社で途方に暮れて泣いていたときの記憶。今までずっと忘れていたのに、何故今頃になって思い出すのだろう。不思議に思ったが、気に止める事でもないと考えるのを止めた。

「…そう言えば、あの時のお兄さん元気にしてるかな？」

あの時出会った不思議な青年。途方に暮れて泣いていた瑠花を約束通り守ってくれたうえに、彼女を神社まで送ってくれた。

「あの時、彼と何の約束したんだっけ？」

守ってくれる代わりに交わした彼との約束。それだけが思い出せない。夢の中でも、その約束は聞こえなかった。

確かに、彼と約束を交わした。大事な、大事な約束を。内容は思い出せないけれど、大切な約束と言う事だけはわかった。

「思い出せない…。大切な約束をしてたっけ言うのは覚えてるのに、肝心な中身が思い出せない」

思い出さなければいけない気がするのに思い出せない。どうしよう、と瑠花は頭を抱える。

その時、下から母の声が聞こえた。

「瑠花ちゃん、朝ごはん出来てるわよー。早く下りてらっしゃい」

「はい、直ぐに降ります」

母の声に促されるようにベッドから降りた。

とりあえず、約束の事は後でゆっくり考えよう、そう結論付けて階段を下りてリビングへ向かった。

「おはようございます、お母様」

「おはよう、瑠花ちゃん」

リビングに入ると、温かな笑顔で母親が彼女を迎え入れた。ダイニングテーブルには、美味しそうな朝食が並べられ、食欲をそそる。

かたん、と自分の席について、瑠花は部屋を見渡した。

リビングには、母と彼女しかない。

「お母様、お祖母様は…?」

「お義母様なら母屋へ行かれてるわ。何でも会議があるとかで」

母の言葉に、瑠花は「そうですか」と軽く頷いた。

如月家は由緒正しき巫女の家系であり、代々如月家の血を受け継ぐ女子が当主になるという歴史を持っている。

現在の当主は瑠花の祖母である如月瑠璃であり、彼女自身強大な力を持つと言われている。

また、如月家に代々仕えている家系もいくつもあり、その家の当主達と会議をするのも当主の務めだ、と祖母が言っていたのを、瑠花は思い出した。

「恐らく、もうすぐしたら行われる『楔祭り』の件でしょうか？確か、お祖母様が幹事を勤めると仰ってましたし」

「ええ、そう仰ってたわね。……私に『才』があれば、お義母様の代わりを勤める事が出来たんでしょうけど……」

そう言っただけ母は苦笑した。寂しそうに、悔しそうに顔を歪める母に、瑠花は何も言えなかった。

瑠花の母は如月家の血を継いでいない……所謂嫁入りしてきた身だ。勿論、如月家に嫁いでくるに相應しい家柄の出だと母は言っていたのを思い出した。

しかし、いくら相應しい家柄の出だとしても『如月家』に代々伝わる『才』は持ち合わせてはいない。

だから、祖母は瑠花の母に如月家当主の座を譲らなかつた。

「お母様……」

「そうそう、お義母様から言伝を預かってるわよ」

思い出したと言わんばかりに告げる母に、瑠花は首を傾げた。

「お祖母様から？」

「ええ、なんでも『今日は離れから出ないように』と仰ってたわ」

祖母からの言伝に瑠花は怪訝そうに母を見た。

いつもは、神社の敷地内だけだが自由に行動が出来ていたのに、今更何故、と言わんばかりの様子を見せる瑠花に、母は苦笑を漏らした。

「今日は何故か朝から嫌な予感がするとかで、今日一日は離れで大人しくしているように、とのことよ」

「……………嫌な、予感ですか」

「あのね、瑠花ちゃん…お義母様は瑠花ちゃんが大切だから」

ガタンツと、母の声を遮るように音をたてて立ち上がった瑠花は不愉快そうに眼を細めた。

「そのことは、十分存じております。それこそ、嫌になるほど肌を感じています。けれど、私は籠の中に捕らわれ飼われるだけの鳥ではありません。一方的に護られるだけの存在だなんて…お断りします。それに…私には、彼らとこの子がいますから心配なんて必要ないです」

キツパリと告げる瑠花の肩には、いつの間にも現れたのか、一匹の管狐が乗っかっていた。

瑠花は管狐を軽くなでると「失礼します」と一言告げてそのまま自室へ足を向けた。

第1話 記憶と謎02

部屋に戻った瑠花は、管狐を肩からベッドの上にそつと降ろした。管狐は「キユウ」と可愛らしく鳴いて瑠花を見上げた。

管狐の可愛らしい目に映る不愉快そうな顔の自分に、瑠花は小さく苦笑した。

「今日ね、とても懐かしい夢を見たの」

「キユウ？」

「私が、まだ小さかった頃の夢なんだけど…『彼』が出てきたの」

『彼』にピクツと管狐は耳を揺らした。

それを見た瑠花は、そう言えばと管狐の頭を優しく撫でた。

「あなたは、彼が私にくれた狐…だったね」

「キユウ」

返事を返すかのように鳴く管狐を、じつと見つめる。

今の今まで忘れてたが、この管狐は『彼』がくれたものだった。

瑠花を護ると約束した彼が彼女の傍にいられなくなって、彼の代わりに彼女を護る為に。

管狐には強い霊力が宿っているから君を護る事が出来る、と『彼』が言っていたのを思い出した。

「何で…今まで忘れてたんだろっ……」

彼との絆でもある管狐ずつと傍にいたのに、何故忘れていたんだろう。

瑠花は首を傾げ眉を寄せた。

何か、おかしい。

彼女の中の小さな疑問はだんだん大きく膨らんでいく。何故、忘れていたのか。何故、思い出せなかったのか。普通なら、有り得もしない。彼との絆が、傍にいたとなると尚更…。

「意図的に、忘却されていた……？」

それなら辻褃は合う。

しかし、そうだとしても何故故意に忘れさせる必要があったのか。おそらく、故意に忘却させられていたとしたら、彼女の祖母の仕業だろう。

「何故、記憶を忘れさせる必要があったの……？あの記憶に、何の意味があるの？」

考えれば考えるほど泥沼に嵌っていく。

これ以上考えても無駄だと感じた瑠花は、一旦考えるのを止めた。

「……あなたは、『彼』のことを覚えてる？私が忘れてしまってる彼の事」

『キコ？』

「もしかして、彼も“人ならざる者”なのかな？だから、記憶を忘却させられてたのかな……」

ツンと管狐をつついて、小さく呟いた。
あの時出会った彼は、もしかしたら妖の類だったのかもしれない。
だから、瑠花を護ってくれたのかも知れない。妖達は、瑠花の価値を知ってるから。

それに、人にしては強烈な気の持ち主だったし、何より“管狐”の持ち主だ。

普通の人間が、『管狐』なんて“靈獣”を持てる筈がない、つまり『彼』は普通じゃない。

「考えても仕方ないし、私には関係ないか。…『彼』が何者であつたとしても、私の恩人には違いないもん。ねえ『瑠衣』もそう思うでしょ？」

瑠衣と呼ばれた管狐は、答えるように『キュー』と一鳴きした。

コンコンツ、と扉を叩く音が部屋に小さく響いた。

「瑠花様、いるか？」

「瑠花様、奈都よ。入っていい？」

鳥原の向こうから聞こえてきた二つの声に、瑠花は視線をそちらに向けた。

シユルルル…と瑠衣は瑠花の首に緩く巻きついて、顔を瑠花同様扉の方へ向けた。

「遠矢？奈都？今日は学校じゃあ…」

不思議に思いながらも力チャリと部屋の扉を開けた。

扉の向こうには黒髪青眼の青年と蜂蜜色の髪で金眼の少女が立っていた。

彼らの服装が、いつもとは違い私服であるのに気付き、どういふ事だと言いたげに、瑠花は視線を二人に向けた。

青年と少女は彼女の疑わしげな視線に、苦笑を零した。

「瑠璃様の言いつけでな、急遽学校を休む事になったんだ」

「心配しなくても、学校にはもう連絡も入れてるわよ？」

そう告げる二人に、瑠花は顔を思いつきり顰めた。

「お祖母様が……。私を本格的にここから出さない気なんだね」

お目付け役の彼らがいたのではこっそり抜け出すことさえ困難になる。

つまり、祖母には瑠花が密かに抜け出そうとしてることもお見通しだったと言う事だ。

用意周到だな…と瑠花は心中で舌打ちをして悔しがった。

第1話 記憶と謎03

「瑠璃様にはお前がこっさり抜け出そうとしているのもお見通しって事だな」

「そうね、あの方には分からないなんて事ないんじゃないかしら」

「で、2人は私の見張り役として呼ばれた…ってことで当たってる？」

ムスツとした顔で問う瑠花に、2人は苦笑を浮かべるだけ。

それはつまり“肯定”という事。

瑠花はますます不機嫌そうに眉を寄せた。

「2人を使ってまで私を閉じ込めたいんだね、お祖母様は」

「あんな、瑠花様は心配なんだよ。お前はあの人のたった一人の愛孫娘。なのに、お前ときたら毎回毎回結構無茶するから」

「それに、私達は元々あなたの『守護者』だから、傍に控えているのは極普通の事なのよ？」

宥めるように話す2人に、瑠花は小さく息を吐いた。

昔から2人には適わないな、と小さく笑い

「うん、ちゃんと分かってる。お祖母様や2人の気持ち。ちゃんと分かってるから」

だから大丈夫、と言えば安心したのか遠矢と奈都は方を撫で下ろし

た。

「それにしても一体何を“視た”んだろうな？」

「瑠璃様、それについては話して下さらなかったものね」

「え？2人共…お祖母様から聞いてないの？」

いつもなら、必ずどちらかが聞いているはずなのに、と微かに目を見開いた。

驚いている瑠花に、遠矢も奈都も肯定するように頷いた。

「ああ、今回は何一つ聞かされてない。ただ、お前の傍に控えて護るように、としか言われていない」

「奈都は…？」

「私も遠矢と同じよ。あなたの傍にいるように言われただけで、何も教えていただけなかった。何かしら理由があるはずなんでしょうけど…あんなに真剣な瑠璃様、久々に拝見したわ」

そう言うと遠矢と奈都は顔を見合わせ

「だから、私は遠矢が聞いてると思ってたんだけど」

「俺は奈都が聞いてると思ってた」

でもどうやらそうじゃなかったみたいで、と話す2人に、瑠花はますます首を傾げた。

2人共が理由を知らないのもそうだが、いつも何処かしら余裕があ

り飄々としている祖母が真剣な様子だったと言う事が頭に引つかかった。

あの祖母が余裕を失う程の事がこれから起こるのだろうか…と考え込む彼女に、遠矢と奈都は困った様子で彼女を見つめた。

「考え込んでも仕方ないだろ。取り合えず、瑠花様は俺達の傍を離れない事。いいな？」

遠矢は言いきかせるように瑠花の頭を軽く撫でた。

「……庭に出るのは？」

駄目かな、と上目遣いで訊いてくる瑠花に、2人は言葉に詰まった。溺愛してると言っても過言ではない程瑠花を可愛がつてる2人としては、その願いを叶えてやりたい。

しかし、家に仕えてる者として当主の命令は絶対だ。

主は瑠花だが、仕えている家の当主は彼女の祖母である瑠璃だ。

その当主からの「離れから出さな」と言う命令もある。どうする、と互いに見詰め合う。

この愛らしい主の願いは叶えてあげたい。

しかし、如月家に仕える者として、当主の命令に背く事はプライドが許さない。

当主を取るか、主を取るか。

究極の2択を迫られた二人は口を閉じた。

少しの間流れた沈黙の後、2人は小さく溜息を吐いた。

「ほんの少しだけな」

「勿論、私達が傍にすることが条件よ？」

軍配は瑠花にあがった。

やはり、可愛い自分達の主には逆らえなかった。

当人はと言えば、告げられた内容にパツと華の咲いた様な笑顔を浮かべていた。

「ありがとうっ。遠矢、奈都」

本当に嬉しそうに笑う瑠花に、まあ良いかと二人は小さく微笑んだ。瑠花に何か起こったそのときは、自分達が彼女を護り抜けば良いだけのことだ。

当主の命令に背く事にはなるが、彼女の祖母の事だ、こつなる事も計算のうちだろう、と深く考えるのは止め、彼女の好きなようにさせようと密かに思った。

第1話 記憶と謎04

同時刻、母屋には、瑠花の祖母であり如月家現当主である如月瑠璃、遠矢の父であり水無月家現当主の水無月流矢、奈都の母であり葉月家現当主の葉月奈緒の3人が向かい合っていた。その場に漂う空気が何処か重々しい。

少しの沈黙の後、口を開いたのは瑠璃だった。

「よく集まってくれたわ、流矢、奈緒」

「俺達はあなたの守護者だ。呼ばればいつだって駆けつけるさ」

「そうですね。私達が主の声に応えないわけがありません」

2人の言葉に、瑠璃羽ほんの少し表情を緩めたが、直ぐに顔を引き締めた。

「2人を呼んだのは他でもない……瑠花のことなの」

瑠璃の口から放たれた名前にピクリと微かに反応する。

瑠璃の顔はいつになく真剣で、何処か焦っているのに気づき、2人は姿勢を正した。

「姫様に何かあったんですか？」

「いいえ、まだ何も起きてないわ。 まだ、ね」

首を横に振って告げるもその声色は硬く、奈緒と流矢は顔を見合わせた。

「まだ…ってことはこれから起こるってことか？」

流矢の問いに、瑠璃は静かに頷いた。

「夢を、見たのよ。あの子が黒き闇と蒼き光に飲まれて…全身に蔦を絡ませて佇んでる、夢。私の見る夢は近い未来に必ず起こる…あれは、あの子の未来を映し出している」

そう言っ瑠璃は悲しげに俯いてしまった。

誰よりも瑠花を可愛がっている彼女にとって、これは悪夢以外の何者でもない。

しかし、彼女の見る夢は必ず現実にかかる。

それは彼女の夢が予知無だから。

「黒き闇…って言うのは、おそらく女郎蜘蛛だろうな。 姫が幼い頃から執拗に狙ってくるから」

「なら蒼き光は？」

奈緒に問われ、流矢は首を横に振った。

彼にも蒼き光の正体は分からない。

2人の視線は彼らの主に向けられた。

「蒼き光を纏うのは八百万の神々…この土地に棲まう古き神」

「この土地に棲む古き神って…数年前、瑠璃様自身が封じられた『彼』のことですか？」

瑠璃は静かに頷いた。

奈緒と流矢はその答えに眼を見開いた。

「けど、あの封印は数百年は解けないはずだ」

それだけ大掛かりな封印を施したんだぞ、と流矢は信じられないと言わんばかりの素振りで瑠璃に告げた。

「解かれるのよ、楔の巫女の力で」

「姫様の力で……?!」

「まだ、姫は覚醒していないはずだぞ?!」

驚く2人に、瑠璃はそうだと言うように頷いた。

彼女自身も、まだ信じられないでいる。

孫の瑠璃はまだ巫女として覚醒していないから、能力を使うことは適わないはず。

しかし、彼女の『夢』は告げてくる。

瑠璃が『彼』の封印を解いてしまうのだ、と。

「おそらく、あの子が覚醒しかけてるんでしょう。幼い頃、私が掛けた封印は…解けかけてるから」

瑠璃の為にかけた封印、それは彼女の能力を来るべき時まで眠らせるもの。

彼女が自身の能力で身を滅ぼさぬよう、妖達に見つからぬよう、絹で優しく包み込むように念入りに掛けられた　瑠璃に出来る精一杯の愛情。

「奈都……」

「心配なのは分かるけど、隣で溜息を吐くのは止めてくれる？あんなの所為で私はおるか瑠花様の幸せまで逃げたらどうするのよ」

「俺はどうでも良いのか」

「どうでもいいわよ」

清々しいほどはつきり告げられた容赦のない言葉に遠矢はがっくりと肩を落とす。

「相変わらず瑠花様以外には辛辣だな、奈都」

「だって本当のことだもの。瑠花様が幸せであればそれで良いの。他人なんて興味はないし、どうでも良いわ。そういうあんただって、そうでしょう？瑠花様以外には冷めた態度とるじゃない」

人のこと言えないでしょ、と奈都は淡々と告げた。

彼女の言ったことは間違っていない。

事実、遠矢にとって優先すべき人は『瑠花』であり、彼女が彼にとっての唯一だ。

だから、奈都の言葉を否定せず、苦笑いを浮かべるだけ。

「確かに、俺にとっても瑠花様は唯一の人で『絶対的な存在』だ。けど一応、同じ守護者のお前のごとも気にはかけてるんだぞ」

そう告げる遠矢が意外だったのか、奈都は微かに目を見開いて視線を遠矢へ向けた。

「まさかあなたの口からそんな言葉を聞く日が来るなんて……今晚は嵐かしら」

「失礼だな」

「だってそんなこと言われるとは思わなかったもの。……まあ、私も少しあんなのこと気にかけてあげてるわよ？ 瑠花様に捧げる気持ちの1000分の1位ね」

「……それは喜んで良いのか？」

「一欠けらでも気にかけてあげてるんだから喜びなさいな。それとも何？ 何か不満でもあるのかしら？」

黒い笑顔を浮かべる奈都に、遠矢は冷や汗をたらりと流す。

「イエエ、トンデモナイ」

彼女の威圧に押され片言になってしまうのは、仕方がないと思う。それほどまでに、彼女の放つ威圧は凄まじいものだったのだ。

お互いに意識を向けていた所為か彼らは、気付かなかった。

瑠花が、その場から姿を消していることに……。

.

第1話 記憶と謎05

「空気が変わった……？」

先程まで聞こえていた2人の声がピタリと止み、無音となった周りに気付いた瑠花は立ち上がり辺りを見渡した。

守護者である2人の姿はなく、周りの景色も先程とは打って変わって重苦しい闇色に包まれていた。

油断したっ、と瑠花は唇を噛み締めた。

2人の意識がほんの少し瑠花から外れた所を狙われた。

神社の区域には祖母による結界が張り巡らされていたはずだがとも思ったが、おそらく長い年月により結界が脆くなっただらうと、自分の中で納得させた。

「それにしてもこの妖気……昔何処かで遭ったことがある……？」

普段結界で守られた中で生活していた瑠花だが、幼い頃何度か妖に狙われたことがある。

どれも大事にはならず済んだものだが、今感じる妖気は、そんな幼い頃の記憶の中感じたものと酷似していた。

まさか、昔から自分を虎視眈々と狙っていたのだらうか、と辺りを漂う妖気に眉を寄せ警戒を強めた。

瑠衣も回りに漂う妖気に毛を逆立てて、瑠花を守るように威嚇する。

「あら、嫌だわあ……折角ご馳走を取り込んだのに、煩い獣まで一緒じゃないのお」

何処からともなく聞こえてきた女の声。

何処か聞き覚えのあるその声は、吐き気がするほどの甘ったるさを

帯びていた。

「あなたは誰？姿を見せなさい」

「まあ、私の事忘れちゃってるのかしらあ？」

残念ねえ、と言いながら現れたのは黒髪の女。
闇の中でギラリと不気味に光る紅い瞳は、しっかりと溜花を捉えていた。

その姿は何処か見覚えがある気がするのだが、はっきりと思い出せず、無意識に顔を顰めた。

今分かるのは、女が『ヒトではない』という事と女の狙いが『溜花』だということだけ。

「……その様子だと、本当に私の事覚えてないみたいねえ」

安心したわあ、とニヤリと不気味に笑う女に、溜花はたらりと冷汗を流した。

頭の中で警鐘が鳴り響く…コイツハ危険ダ と。

「あなた…『ヒト』ではないのでしょうか？」

「当たり前よお、あんな脆弱な生き物と一緒にしないで欲しいわあ。

私は『女郎蜘蛛』…蜘蛛を統べる妖よお」

「女郎蜘蛛……………」

「そう、私は蜘蛛を統べる女王…どんな蜘蛛だろうと私の支配下のよお」

「その女郎蜘蛛が私に何の用？」

「決まってるじゃない、あなたを喰らいに来たのよ。契りの巫女の血肉は私達妖にとって最高のご馳走だもの。」

「やっぱり、目的はそれなのね」

「見たところ『覚醒』はまだみたいだし、今がチャンスってやつだもの。これを逃す手はないでしょ？」

女郎蜘蛛はそう言って無数の糸を瑠花に向かって放つ。

『キューー！！』

ポウツと強烈な焔が、女郎蜘蛛が放った糸を瑠花に届く前に焼き消した。

「んもうつ！！本当に邪魔ばかりしてくるわねえ、使役獣の分際でえ！！！！」

『グルルルルッ』

普段では考えられないくらい低い声で唸り、女郎蜘蛛を睨みつけた。

「本当に邪魔ばかり…折角『彼』がいないっていうのに、それが代わりに私の邪魔をするんだもの。油断もすきもないわねえ」

心底嫌そうに瑠衣を見やる女郎蜘蛛の言葉に、瑠花はピクリと眉を寄せた。

「あなた、彼を……この狐の主を知ってるの？」

「よく知ってるわよ……いつも邪魔ばかりしてくるもの。それ以前に、この界限で『彼』を知らないものはいないと思うわよ。」

そこまで言っつて女郎蜘蛛は何かに気づいたかのような顔で瑠花へ視線を向け

「まさか、『彼』のことも忘れちゃったのかしらあ？」

ニヤリ、と不気味に微笑んだ。

第1話 記憶と謎06

「彼のこと、あなたは忘れちゃったのかしら？」

ニヤリと意味ありげな笑みと共に投げかけられた問いに、瑠花は答えなかった。

否、答えられなかったという方が正しい。

どんな理由があるかと、女郎蜘蛛の言うとおり、彼女は『彼』を覚えてはいないのだから。

黙り込む少女に、女郎蜘蛛は彼女が覚えていないのを確信したのだろう、扇を口元に当て、大声で笑った。

「アハハハハツ、なんて滑稽、なんて愉快。まさか、『彼』のことを忘れてるなんてねえ。本当に都合が良いわあ。『彼』はあなたに『名』を呼ばれないとあなたを護る事が出来ないのに、その『名』を忘れてるなんてねえ」

可哀想にねえと、と心にもないことを告げる女郎蜘蛛に、瑠花は何も言い返せない。

心底可笑しそうに笑う女郎蜘蛛に、悔しそうに唇を噛む瑠花に、応える様に瑠衣が女郎蜘蛛に向かって焰弾を放った。

が、寸でのところで、女郎蜘蛛は扇を振って防いだ。

「危ないわねえ。ご主人様に似て野蛮な使役獣だこと。もう少しで丸焦げになっちゃうところだったわよお？」

威嚇を止めない瑠衣を睨みつけ、憎憎しげに言う女郎蜘蛛に、瑠花は静かに口を開いた。

「彼は、あなたと同じ妖モリなの？」

その問いに、女郎蜘蛛は一瞬動きを止めたが、直ぐに扇で口元を隠し

「いいえ、彼は私と同類ではないわよお。忌々しいけど、彼は別格・
・私達とは比べ物にならない存在よお」

忌々しいと心の底から思ってるのであろう刺々しい声で言い放たれた言葉に、瑠花は無意識に安堵に似た溜息を小さく零した。

彼が、妖ではないと分かったからであろうか。

彼女の安心したような様子に、女郎蜘蛛はフンツと鼻で笑った。

「あらあら、忘れてるのに随分嬉しそうねえ。そんなに『彼が』妖
じゃないと分かって嬉しいのかしらあ？でも、そんな事もう考える
必要なんてないのよお、あなたは私に食べられるのだから！！！」

その言葉と共に放たれた糸が真つ直ぐ瑠花に襲い掛かる。

すかさず瑠衣が燃やそうと炎を放つが、鋼鉄のような糸に弾かれ、
瑠衣へ跳ね返ってしまった。

『ギヤウツ』

「瑠衣！！！」

跳ね返された焰が瑠衣に当たり、瑠衣が悲鳴をあげ倒れた。

瑠花は瑠衣を抱きあげ、己の持つ治癒能力で瑠衣を癒していく。

「ふふふつ、そう何度も同じ攻撃を喰らうはずないでしょお？この
糸はね、焰も弾き返すほどの硬度を持った特殊な糸なの。狐の焰な
んで簡単に弾き返せるわあ」

するりと糸を撫で、うっとりとした口調で語る女郎蜘蛛を睨み付けながら、腕の中の溜衣を抱きしめる。

今まで妖に襲われた時は、溜衣や遠矢達が溜花を守っていた。しかし、今は遠矢達はいない。溜衣も、深手を負ってしまった。

溜花自身、楔の巫女と呼ばれてはいるが、身を護る術がない。祖母のように、妖と対立出来る程の力を持ち合わせていない。

絶体絶命の中、ふとあの青年を思い出す。

彼の、名前はどのように紡ぐのだろうか。

思い出さなければならぬ、溜花はそう強く思った。

「そろそろゲームオーバーよお、楔の巫女様あ。大人しく私に食べられて頂戴!!」

ピュンツと糸が勢いよく溜花目掛けて飛んでくる。

溜花は目を瞑って叫ぶ。

「皇夜!!!!」

無意識に、彼女の中で眠っていた彼の名前を言の葉にする。

フワリ、温かな風が溜花を包んだ。

第1話 記憶と謎07

「なっ………?!」

目の前の光景に、女郎蜘蛛は驚きを隠せなかった。

瑠花の声に応えるように風を纏って現れたのは、蒼銀の髪の青年。

両の腕に少女を大事そうに納め、女郎蜘蛛の糸を風で弾き飛ばした。蒼銀から覗く2つの紅玉は爛々と怪しげに輝きを放ち、女郎蜘蛛を見据えた。

「あなたは……」

自分を大事そうに抱える青年を、瑠花は見上げた。

蒼銀の髪に、紅玉の瞳……彼は、確かに瑠花の記憶にある青年だった。

「………今は眠れ。いい子だから」

優しさを含んだテノールが瑠花に流れ込んでくる。

その心地よさに、瑠花は瞼を閉じて意識を手放した。

「まさか、あなたが出てくるとは思わなかったわぁ」

少女を抱きしめる青年を嫌そうに見下ろす女郎蜘蛛に、彼も嫌そうに睨みあげた。

「俺も、眠ってる間に手を出されるとは思わなかった。油断し過ぎ

たな」

「そのまま永遠に眠っていても良かったのにい。まだ『封印』が解ける期間じゃないでしょお？」

「はっ、お断りだ。俺のものに手を出されるのは気分が悪い。お前こそ、そろそろこの土地から出て行け」

「嫌よお。ここ、気に入ってるんですものお」

お互い睨みあいながら、言葉の応酬を繰り返す。

「ねえ、偉そうなこと言ってるけど、貴方は『元』土地神でしょお？この土地神は新しい神がついてるはずだものお。そうでしょ？『皇の夜宮』様？それとも『皇夜』様とも呼びましようかあ？」

クスクスと笑いながら告げられた名前に、青年 皇夜はますます嫌そうに顔を顰め女郎蜘蛛を睨む。

「お前に名前を呼ばれる筋合いはないな。その『名』を許したのはこの子一人だけだ」

「あああ、随分と御執心のようですわねえ」

「お前に言われる筋合いはない。それより、随分この子と俺の使役獣を可愛がってくれたみたいだな」

腕の中の溜花と溜衣を一度見つめて、顔をあげたその瞳には、静かな怒りが見て取れた。

彼から放たれる殺気に、女郎蜘蛛は微かに身を引いた。

それだけで分かる彼と自分の力量の差に冷汗を流す女郎蜘蛛だが、口元を扇で隠し、平然を装った。

こうでもしなければ、今にも膝をついてしまいそうだった。それほど、皇夜から放たれる殺気は凄まじいのだ。

「あらあ、巫女は別としてあなたの使役獣を可愛がった覚えはないわあ。邪魔をするからちよーっと大人しくして貰っただけだものお」

「ほざけ」

ゴオツと皇夜の周りの風が唸る。

「本当なら、お前をこの場で八つ裂きにしてやりたいところなんだがな。俺の力が完全じゃないのが惜しいな・・・」

不満そうに呟くと、右手を女郎蜘蛛の方へ突き出す。

「今回は見逃してやる、早々にこの土地から立ち去るんだな」

その言葉と共に、風が女郎蜘蛛を締め上げ竜巻となって遠くへ移動していく。

「覚えてらっしゃいいい！！必ず、巫女は私が貰うんだからあ！！」

捨て台詞を吐いて、竜巻と共に去っていく女郎蜘蛛をひと睨みして、腕の中に視線を落とす。

『キユウ・・・』

情けない声で鳴く瑠衣の頭をそつと撫で、皇夜はフツと微笑んだ。

「よく瑠花を護ったな。仮の姿でよくやった」

皇夜の誉め言葉に嬉しそうにひと鳴きして、瑠衣は眼を閉じた。

相当疲れが溜まってるのだろう、と皇夜は小さく苦笑し、辺りを見渡した。

辺りの景色は先程のまま。

どうやら造り主の女郎蜘蛛がいなくなっても壊れない仕様のものらしい。

「全く、面倒なことをする」

不機嫌そうに呟いて、右腕を一振りする。

その衝動で出来た風の刃が辺りに散り、施されていた結界を跡形もなく壊していく。

結界が壊れたのを確認して視線を前に向けるとそこには奈都と遠矢が驚愕の顔で皇夜を見つめていた。

いや、正確には皇夜の腕に抱かれてる彼らの主を。

「・・・お前は、誰だ」

遠矢が重々しく口を開く。

明らかに警戒している2人に、皇夜は腕の中の瑠花に視線を向けると小さく溜息を吐いた。

「お前らがこの子の『守護者』か？」

皇夜の問いに、2人は小さく頷く。

それを見て、皇夜は腕の中の少女を奈都へ手渡した。

「主を危険な目に遭わせて助けも出来ないなんて・・・『守護者』失格だな」

その一言に、奈都と遠矢は固まった。しかし、皇夜の言葉は止まらない。

「『守護者』の役割は『主』の傍に使え護る事。主を一人にして危険に晒す事も、主を危険な目から救えないなんてことも言語道断」

「・・・そんなこと、分かってるわ!!」

今回の件については、確かに2人に非があった。

可愛い主の頼みとはいえ、当主の命を無視し外に出したことも。

主からほんの少し意識を外したことも。

全て2人の非によるもの、責められるのは仕方がない。

「だけど、見ず知らずの貴方にだけは、言われる筋合いはないわよ!!」

皇夜を睨んで叫ぶ奈都に、遠矢も頷く。

皇夜は少し考える素振りを見せ、スツと眼を細めた。

「その子は、俺の『花嫁』だ。花嫁に関して口出す権限はあるはずだが?」

「なっ?!」

皇夜の言葉に、2人は眼を見開く。

この男は、今なんと言った。

主のことを『花嫁』といわなかったか？

「それはどういうことだ?!」

「……………当主にでも聞いてみる。聞けるものならな」

2人を睨みつけそう吐き捨てる、瑠花の頬をそつと撫で

「……………俺は待ってる。早く、見つけ出せ」

そう一言呟いて、フツと火が消えるように消えてしまった。

第1話 記憶と謎07（後書き）

だいぶ待たせて申し訳ありません（汗）

難産でしたが、今回で第一話は終わりになります。

もしかしたら書き足したり、書き直したりするかもしれませんがので承くくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2550q/>

楔の花嫁

2011年10月7日03時52分発行